

教職課程コアカリキュラムに対応した「教育課程論」の実践と効果（1）

－栄養教諭養成課程における試行の検証－

Effects of "Curriculum Theory" Practice Corresponding to "Core Curriculum in Teacher Training Programs" (1): Verification of Trial in the Nutrition Teacher Training Program.

新井英志¹⁾

Hideshi ARAI

本稿は、栄養教諭養成課程において、教職課程コアカリキュラム対応型授業である「教育課程論」を2018年度に試行的に実践した効果について、3つの研究課題を設定して検証した結果を報告する。研究対象は、2018年度に「教育課程論」を履修したT大学栄養学科・教職課程の1年次生26名である。研究方法は、「最終授業後のアンケート」（質問紙調査で5件法と記述を併用、質問項目40項目）を実施し、当該学生の自己評価結果について統計解析を行った。1つ目の課題である「教職課程コアカリキュラム対応型の「教育課程論」は、授業目標を達成しているか。また、授業内容は適切であったか。」であるが、授業目標については、「基本目標」（従来の授業の目標）と「到達目標」（教職課程コアカリキュラムで規定）の評価平均値がそれぞれ、4.21、4.15だったことや、評価段階の内訳から判断して、概ね達成したと評価した。また、授業内容の適切さについては、「基本目標」「到達目標」「授業総括」「学習状況」の4区分により総合的に判断し、概ね達成したと評価した。2つ目の課題である「教職課程コアカリキュラムで示された「到達目標」と「一般目標」（シラバスでは「授業テーマ」と表記）の関係性はどの程度あるか。」については、両者間の相関係数は0.9443と正の強い相関関係が見られた。3つ目の課題である「「教育課程論」において、教職課程コアカリキュラム対応表と「到達目標」の自己評価結果の関係性は授業評価に活用できるか。」については、授業評価の一部として活用できると判断した。提案した方法は、授業回毎の「到達目標」の状況を簡易的に把握できる利点もあり、授業評価の一部として活用することは十分可能であると考えた。さらに、今回の結果から、「教育課程論」における授業改善の視点を、評価平均値の低い項目等に着目して確認した。

1) 天使大学 看護栄養学部 教養教育科

(2019年8月26日受稿、2020年2月4日審査終了受理)

The purpose of this study was to examine the effects of 2018 lectures on “Curriculum Theory,” which is a course in the Nutrition Teacher Training Program based on “Core Curriculum in Teacher Training Programs.” Participants in this study were 26 first-year students enrolled in the “Curriculum Theory” course in 2018 in the Nutrition Teacher Training Program in the Department of Nutrition at T University. A self-administered questionnaire with 40 items rated on a five-point scale was given on the final lecture day of the course. Data were statistically analyzed from the viewpoint of the self-evaluation of the students in the study. There were three main research questions: 1) whether or not the “Curriculum Theory” achieved its course goals and its lecture contents were appropriate; 2) to what extent “Achievement Goals” shown in “Core Curriculum in Teacher Training Programs” are related to “General Goals,” shown as “Class Theme” in the Syllabus; and 3) whether or not each lecture could be evaluated using the “Correspondence Table for Core Curriculum in Teacher Training Programs” and the results of the student self-evaluation in “attainment targets.” Regarding the first research question, the mean value of “course goals” was 4.21, and the mean value of “attainment targets” shown on “Core Curriculum in Teacher Training Programs” was 4.15, both indicating that “Curriculum Theory” achieved its course goals for the most part. In addition, findings concerning the “course goals,” “attainment targets,” “lecture overview reviews,” and “learning situations” show that the lecture contents were generally appropriate. Regarding the second research question, the Correlation Coefficient between the “target goal” and the “general goal” was 0.9443, a strong positive correlation. Regarding the third research question, findings indicate that each lecture can be evaluated by the use of “Correspondence Table for Core Curriculum in Teacher Training Programs” and the results of the student self-evaluation in “attainment targets,” since both facilitate examination of the degree to which “attainment targets” were achieved. Furthermore, the results indicate that the viewpoint of improving classes in the “Curriculum Theory” was identified by focusing on items with low average evaluation values.

キーワード

教育課程論：Curriculum Theory

教職課程コアカリキュラム：Core Curriculum in Teacher Training Programs

到達目標：Attainment Targets

授業効果：Effects of Classes

栄養教諭養成課程：Nutrition Teacher Training Program

I. はじめに

2019年4月から各大学で教職課程の新教育課程がスタートしたが、この新教育課程では、教職課程コアカリキュラムを踏まえた教職課程科目の実施が一つの特徴となっている。この新教育課程の実施に先立ち、文部科学省は再課程認定を実施し、2017年7月に説明会を開催、2018年4月末日に書類提出を締め切り、2019年2月に審査結果を各大学に送付した。教職課程コアカリキュラムを踏まえた教職課程科目の実施が必須条件とされた今回の再課程認定ではあったが、教職課程コアカリキュラムが確定したのは遅く、書類提出のわずか5か月余り前の2017年11月17日だった。教職課程コアカリキュラムの活用については、「教職課程の担当者が、シラバスを作成する際や授業等を実施する際に、学生が当該事項に関する教職課程コアカリキュラムの内容（「全体目標」「一般目標」「到達目標」等）を修得できるよう授業を設計・実施し、大学として責任をもって単位認定を行うこと」¹⁾とされている。当然のことながら、再課程認定のために、これらのシラバス作成、教員確保、教育課程編成など、各大学が努力をした結果、再課程が認定された大学においては、新教育課程が開始できたことになる。

さて、T大学で筆者が担当する「教育課程論」は、2018年度から教職課程コアカリキュラム対応型の授業として、先行実施した。T大学の「教育課程論」（1年次1単位の後期必修科目）は、教職課程コアカリキュラムによると、「教育課程の意義及び編成の方法（カリキュラム・マネジメントを含む。）」の科目として位置付けられている。2016年度の講義でも「カリキュラム・マネジメント」を含む講義資料を使用しており、「教育課程論」は、以前から教職課程コアカリキュラムの内容を含めて実施していたと判断した。2017年12月に再課程認定のためにシラバスを再度見直し、一部の事項を追加して文部科学省に提出した。さらに、2018年度か

らは、このシラバスに基づき、「教育課程論」を先行実施した。その理由は2点ある。1点目の理由は、筆者が「生徒指導論」で報告^{2)、3)}した学習効果に関連して、従前の授業目標（以下、「基本目標」と、教職課程コアカリキュラムで規定された「到達目標」の関係性も含めて学習効果を検証する必要があったこと。2点目の理由は、教職課程コアカリキュラム対応型授業の視点で、その学習効果の測定や授業評価の方法を開発・検証する必要があったことによる。

これらのことから、本研究においては、教職課程コアカリキュラム対応型授業である「教育課程論」の実践における効果について、3つの研究課題を設定して検証することを目的とした。

本稿は、Iと次を含め9つの部分からなる。

- II. 先行研究 III. 研究課題 IV. 研究方法
V. 実践概要と質問項目 VI. 結果 VII. 考察
VIII. まとめ IX. 今後の課題

II. 先行研究

先行研究について、国立情報学研究所のCiNii検索で確認した（2019年7月2日現在）。「教育課程論」の単語を含む研究論文は少なく128件であった。このうち、「教育課程論」「授業」で28件だったが、「教育課程論」「授業評価」では2件と激減した。また、「教職課程コアカリキュラム」「授業」では7件、「教育課程論」「教職課程コアカリキュラム」では0件であった。「教育課程論」「授業評価」に関する論文としては、細川（2004）⁴⁾が、授業各回の最後に「リフレクション・ノート」と名付けたプリントを学生に配布し、学生による5段階の満足度の評定結果を明らかにした。また、「満足・不満」の理由の記述から、学生による授業評価観点のカテゴリーを作成した。

「教職課程コアカリキュラム」に関する論文については、山田（2018）⁵⁾が、教職課程コアカリキュラムを踏まえた「総合的な学習概論」のシラ

バスを検討した。佐藤ら（2019）⁶⁾は、体育・スポーツ系教員養成大学における教職課程コアカリキュラムを取り入れた授業モデルとして「教師論」の実践と成果などを報告した。現時点で、「教育課程論」において教職課程コアカリキュラムに関係した研究も見られないことは、教職課程の質保証という視点からも由々しき状況であり、今後、これらの研究が大いに期待される現状にある。

Ⅲ. 研究課題

前述した現状を踏まえ、次の3点を研究課題として設定した。

- 1) 教職課程コアカリキュラム対応型の「教育課程論」は、授業目標を達成しているか。また、授業内容は適切であったか。
- 2) 教職課程コアカリキュラムで示された「到達目標」と「一般目標」（文部科学省へ提出したシラバスでは「授業テーマ」と表記、以下「一般目標」と表記）の関係性はどの程度あるか。
- 3) 「教育課程論」において、教職課程コアカリキュラム対応表⁷⁾と「到達目標」の自己評価結果の関係性は授業評価に活用できるか。

Ⅳ. 研究方法

1. 調査対象

調査対象は、2018年度に「教育課程論」を履修したT大学栄養学科・教職課程の1年次生32名のうち、研究参加に同意し、かつ必要なデータが全て揃っていた26名とした。

2. 調査方法

対象の学生が評価・記述した「最終授業後のアンケート」の内容を分析して検証した。このアンケートは、質問紙調査で5件法と記述を併用し、A4判裏表2枚で、2018年度は最終授業日である12月17日に実施した。今回の報告では、2枚の調査用紙のうち、アクティブ・ラーニング関連項目を

除く1枚の内容を調査対象とした。その表面は「Ⅰ. 授業改善アンケート」と呼称し、17項目の質問からなり、一部に記述を含む。また、裏面は「Ⅱ. 振り返り評価アンケート」と呼称し、23項目の質問からなり、記述は含まなかった。

また、統計解析には、Excel 2010(Ver. 14.0.7166.5000)と、エクセル統計(Ver. 3.10)を使用した。なお、有意水準は5%とした。

3. 倫理的配慮等

本研究は、本学研究倫理委員会の承認（受付番号2018-25）を受けた。承認時の委員会の指示により、各年度の授業最終日に、研究対象者に口頭および文書で、成績には一切関係が無いこと等を説明するとともに、研究協力を依頼し、承諾書の受理をもって研究参加の同意とみなした。

Ⅴ. 実践概要と質問項目

1. 「教育課程論」の実践概要

本授業の実践内容は、2016年度以降大きな変化はない。表1に教職課程コアカリキュラムを踏まえた2018年度のシラバスを示す。表1において、下線部分が2018年度から新たに付け加え、変更した部分である。大きな変更点としては、「カリキュラム・マネジメント」をシラバスに明記したことであったが、講義内容全体における本質的な変化はなかった。また、教科書としては、「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編」⁸⁾を用いるとともに、市販されている「教育課程論」関係の本^{9)、10)、11)}を参考図書として学生に紹介した。

本授業の特徴としては、8回の講義のうち、前半の5回で、教職課程コアカリキュラムの全体目標で示された、教育課程の意義、教育課程の編成の方法及びカリキュラム・マネジメントの内容を中心に学ぶ。この中では、教員による資料配付に基づく講義とともに、アクティブ・ラーニングの要素を組み入れ、学生が自ら考え・記述する「学習シート」を活用した。さらに後半の3回では、

表 1. 2018年度「教育課程論」のシラバス

回	授業内容の概要
第1講	1 オリエンテーション 教育課程とは 1) 教育課程とカリキュラム 2) 教育課程の意義と編成の基本原理
第2講	2 教育課程編成・実施の方法 1) 教育課程の歴史 2) 教育課程編成・実施と学習指導要領
第3講	3 教育課程編成・実施に関連する法令 1) 教育基本法 2) 学校教育法 3) 学校教育法施行規則 など
第4講	4 我が国の教育課程改革の変遷と社会的背景 1) 近代教育と戦後「新教育」の教育課程改革 2) 学習指導要領の変遷 3) 現代の教育改革の方向
第5講	5 学習指導要領の展開とカリキュラム・マネジメント 1) 教科書と学習指導要領 2) カリキュラム・マネジメント 3) 学習指導と学習指導案実例 (教科、学級活動)
第6講	6 学習指導案と授業設計(1) 1) 学習指導案の作成 2) 指導案の相互評価(グループ単位)
第7講	7 学習指導案と授業設計(2) 1) 指導案を用いた実践(グループ単位・全体発表) 2) 実践後の評価と改善
第8講	8 学習指導案と授業設計(3) 1) 指導案を用いた実践(グループ単位・全体発表) 2) 実践後の評価と改善 まとめ

※ 下線部は、教職課程コアカリキュラムに対応するため、2018年度から追加した事項である。

栄養教諭としての実践的指導力とモチベーションを高めることを目的として、学習指導案作成と模擬授業の実施・発表を行うアクティブ・ラーニング主体の授業を実施した。これらの実践は、T大学において、過去数年間の授業改善を踏まえつつ作成したシラバスに基づく「教育課程論」と言える。

2. 質問紙調査における質問項目の検討

質問項目の概要は自己評価結果とともに表2に示した。質問項目の検討に当たり、「I. 授業改善アンケート」では、授業改善のデータを得ることを主な目的として17の質問項目を設定した。その内訳は、教職課程コアカリキュラムを意識しない2015～2017年度までの授業目標を「基本目標」として3項目含めた。また、教職課程コアカリキ

表 2. 2018年度の自己評価結果一覧

アンケートの区分	調査項目	質問番号	基本統計量 (n=26)						合計
			平均値	標準偏差	不偏分散	標準誤差	尖度	歪度	
I. 授業改善アンケート	基本目標 (従来の授業目標)	I-Q1	4.12	0.33	0.11	0.06	4.91	2.56	107
		I-Q2	4.08	0.63	0.39	0.12	-0.20	-0.05	106
		I-Q3	4.42	0.58	0.33	0.11	-0.73	-0.35	115
	到達目標	I-Q4	4.04	0.53	0.28	0.10	1.14	0.06	105
		I-Q5	4.12	0.71	0.51	0.14	-0.89	-0.17	107
		I-Q6	4.23	0.59	0.34	0.12	-0.21	-0.06	110
		I-Q7	3.98	0.72	0.52	0.14	1.15	-0.64	103
		I-Q8	3.85	0.92	0.86	0.18	-0.67	-0.33	100
		I-Q9	4.46	0.51	0.26	0.10	-2.14	0.16	116
		I-Q10	4.27	0.60	0.36	0.12	-0.40	-0.17	111
		I-Q11	3.96	0.60	0.36	0.12	0.14	0.01	103
		I-Q12	4.50	0.58	0.34	0.11	-0.48	-0.66	117
	授業総括2	I-Q13	4.31	0.68	0.46	0.13	-0.67	-0.47	112
	授業総括3	I-Q14	4.46	0.65	0.42	0.13	-0.27	-0.81	116
	学習状況2	I-Q15	4.12	0.71	0.51	0.14	-0.89	-0.17	107
	学習状況3	I-Q16	3.65	1.13	1.28	0.22	-0.27	-0.69	95
	学習状況1	I-Q17	4.31	0.68	0.46	0.13	-0.67	-0.47	112
II. 振り返り評価アンケート	授業総括1	II-Q1	4.31	0.62	0.38	0.12	-0.51	-0.29	112
	一般目標(1)	II-Q2	4.35	0.63	0.40	0.12	-0.54	-0.41	113
	一般目標(2)	II-Q3	4.15	0.67	0.46	0.13	-0.65	-0.19	108
	一般目標(3)	II-Q4	4.19	0.63	0.40	0.12	-0.40	-0.17	109
	一般目標(4)	II-Q5	4.58	0.64	0.41	0.13	0.67	-1.29	119
	理解項目	II-Q6	4.50	0.58	0.34	0.11	-0.48	-0.66	117
		II-Q7	3.96	0.72	0.52	0.14	-0.94	0.06	103
		II-Q8	4.12	0.65	0.43	0.13	-0.46	-0.11	107
		II-Q9	4.46	0.58	0.34	0.11	-0.64	-0.50	116
		II-Q10	4.54	0.58	0.34	0.11	-0.23	-0.82	118
		II-Q11	4.38	0.57	0.33	0.11	-0.74	-0.21	114
		II-Q12	4.65	0.56	0.32	0.11	1.22	-1.40	121
		II-Q13	4.15	0.61	0.38	0.12	-0.18	-0.08	108
		II-Q14	4.12	0.65	0.43	0.13	-0.46	-0.11	107
	意欲項目	II-Q15	4.62	0.50	0.25	0.10	-1.90	-0.50	120
		II-Q16	4.62	0.64	0.41	0.12	1.19	-1.47	120
		II-Q17	4.54	0.51	0.26	0.10	-2.14	-0.16	118
II-Q18		4.54	0.51	0.26	0.10	-2.14	-0.16	118	
II-Q19		4.62	0.57	0.33	0.11	0.59	-1.19	120	
II-Q20		4.42	0.64	0.41	0.13	-0.43	-0.67	115	
II-Q21		4.38	0.57	0.33	0.11	-0.74	-0.21	114	
II-Q22		4.58	0.58	0.33	0.11	0.11	-1.00	119	
II-Q23		4.50	0.51	0.26	0.10	-2.17	0.00	117	
IのQ1～Q17平均値			4.17	0.66	0.46	0.13	-0.07	-0.13	108
IのQ1～Q3平均値			4.21	0.51	0.28	0.10	1.33	0.72	109
IのQ4～Q12平均値			4.15	0.64	0.42	0.13	-0.26	-0.20	108
IのQ13～Q17平均値			4.17	0.77	0.62	0.15	-0.55	-0.52	108
IIのQ1～Q3平均値			4.40	0.60	0.36	0.12	-0.52	-0.50	114
IIのQ2～Q5平均値			4.32	0.65	0.42	0.13	-0.23	-0.51	112
IIのQ6～Q15平均値			4.35	0.60	0.37	0.12	-0.48	-0.43	113
IIのQ16～Q23平均値			4.52	0.57	0.32	0.11	-0.72	-0.61	118
40項目全体の平均値			4.30	0.62	0.40	0.12	-0.33	-0.34	112

キュラムで示された「到達目標」8項目に、授業独自の「到達目標」1項目を加えて「到達目標」は9項目とした。さらに、残り5項目は学習状況に関する質問（以下、「学習状況」）3項目と授業の総括的質問（以下、「授業総括」）のうちの2項目とした。なお、教職課程コアカリキュラムによる「到達目標」の表記は、「(1) 1), 2), … (2) 1), 2), …」であるが、本稿では「1-1, 1-2, … 2-1, 2-2, …」とし、文言は同一とした。

「Ⅱ. 振り返り評価アンケート」は、Ⅰ. 以外の視点・表現で、主にどのような資質能力が身に付いたかを評価することを目的とし23の質問項目を設定した。その内訳は、「授業総括」1項目、教職課程コアカリキュラムで示された「一般目標」4項目、さらには、授業における理解状況をⅠ. とは別の表現で間接的に評価する「理解項目」10項目と、授業を通して身に付けた行動への意欲を評価する「意欲項目」8項目とした。また、「一般目標」は、再課程認定のため2018年3月に文部科学省に提出したシラバスやT大学の2019年度シラバスにおいて、「授業テーマ」として記載したものである。2018年度の学生には「授業テーマ」を特に意識させることもなかったため、本報では「一般目標」という表記に統一した。

なお、2018年度のシラバスにおいては、「基本目標」と「到達目標」を併記した。また、10月の授業開始時には、両目標を意識して授業に取り組むようにとだけ学生に指導し、それ以外は例年と同様に授業を実施した。

Ⅵ. 結果

表2に2018年度の「最終授業後のアンケート」における学生による自己評価結果を示した。値はいずれもn=26である。「Ⅰ. 授業改善アンケート」において、17項目全体の評価平均値は4.17であった。内訳を見ると、「基本目標」3項目については、評価平均値が4.21であり、その値の範囲は4.42～4.08であった。また、「到達目標」9項目につい

ては、評価平均値が4.15であり、その値の範囲は4.50～3.85であった。

「Ⅱ. 振り返り評価アンケート」においては、23項目全体の評価平均値は4.40であった。「一般目標」の4項目については、評価平均値が4.32であり、その値の範囲は4.58～4.15であった。「理解項目」の10項目については、評価平均値が4.35であり、その値の範囲は4.65～3.96であった。また、「意欲項目」の8項目について、評価平均値は4.52であり、その値の範囲は4.62～4.38であった。

Ⅶ. 考察

Ⅵの結果を踏まえ、Ⅲで設定した3つの研究課題と授業改善を加えた4点について考察を述べる。

1. 教職課程コアカリキュラム対応型の「教育課程論」は、授業目標を達成しているか。また、授業内容は適切であったか。

1) 授業目標の達成状況

授業目標の達成状況については、「基本目標」と「到達目標」の自己評価結果で判断し、概ね達成したと評価した。「基本目標」と「到達目標」の自己評価結果は図1に、それぞれ評価平均値の高い順に並び替えて示した。図1より、「基本目標」3項目の評価平均値は4.21で、4.42～4.08の範囲にあった。また、評価段階の内訳に注目し評価5と評価4の合計を見ると、全てが100%～85%の範囲にあり、評価3以上であった。このことから、「基本目標」は概ね達成したと評価した。次に「到達目標」は、9項目の評価平均値が4.15であり、その範囲は4.50～3.85であった。さらに、評価5と評価4の合計を見ると、9項目中8項目で81%を超えていた。1項目だけ、評価5と評価4の合計が65%ではあったが、全体の平均値を勘案して、「到達目標」も概ね達成したと評価した。以上の2点より、授業目標は概ね達成したと評価した。

ところで、「基本目標」は従来から用いていた授業目標であり、これと教職課程コアカリキュラムで規定された「到達目標」の違いについても確認

整理No	質問項目	平均値	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
基本目標 3	Q 3. 3.教育課程を体系的総合的に計画・実践・評価する一連の過程を体験的に学び、栄養教諭としての実践的指導力を高める。	4.42	0.58	4%	50%	46%			
基本目標 1	Q 1. 1.教育課程の意義、歴史、編成の方法について理解する。	4.12	0.33	88%	12%				
基本目標 2	Q 2. 2.教育課程編成における課題について、改善する方法などを考察する。	4.08	0.63	15%	62%	23%			
到達目標 4-1	Q12. 4-1:栄養教育における学習指導案作成と実施方法検討の重要性を理解している。	4.50	0.58	4%	42%	54%			
到達目標 2-3	Q 9. 2-3:単元・学期・学年をまたいだ長期的な視野から、また児童及び生徒や学校・地域の実態を踏まえて教育課程や指導計画を検討することの重要性を理解している。	4.46	0.51	54%	46%				
到達目標 3-1	Q10. 3-1:学習指導要領に規定するカリキュラム・マネジメントの意義や重要性を理解している。	4.27	0.60	8%	58%	35%			
到達目標 1-3	Q 6. 1-3:教育課程が社会において果たしている役割や機能を理解している。	4.23	0.59	8%	62%	31%			
到達目標 1-2	Q 5. 1-2:学習指導要領改訂の変遷及び主な改訂内容並びにその社会的背景を理解している。	4.12	0.71	19%	50%	31%			
到達目標 1-1	Q 4. 1-1:学習指導要領の性格及び位置付け並びに教育課程編成の目的を理解している。	4.04	0.53	12%	73%	15%			
到達目標 2-1	Q 7. 2-1:教育課程編成の基本原則を理解している。	3.96	0.72	4%	15%	62%	19%		
到達目標 3-2	Q11. 3-2:カリキュラム評価の基礎的な考え方を理解している。	3.96	0.60	19%	65%	15%			
到達目標 2-2	Q 8. 2-2:教科・領域を横断して教育内容を選択・配列する方法を例示することができる。	3.85	0.92	8%	27%	38%	27%		
授業総括 3	Q14. 授業を通して、あなたの教職に対する意識や意欲は高まりましたか。	4.46	0.65	8%	38%	54%			
授業総括 1	Q2-1. 授業を通して、教育課程に対する考え方や視野が講義前より広がりましたか。	4.31	0.62	8%	54%	38%			
授業総括 2	Q13. 授業を通して、栄養教諭として、教育課程の意義や役割は理解できましたか。	4.31	0.68	12%	46%	42%			
学習状況 1	Q17. 教育課程論で提出・評価対象の「学習シート」の活用度はいかがでしたか。	4.31	0.68	12%	46%	42%			
学習状況 2	Q15. シラバスでは、「各授業前後に1時間～2時間程度の予習・復習を要する。」とあるが、これをするための授業内容やプリント等の授業資料の量は適切でしたか。	4.12	0.71	19%	50%	31%			
学習状況 3	Q16. シラバスでは、「各授業前後に1時間～2時間程度の予習・復習を要する。」とあるが、このことを含めてあなたの授業への取り組みはどうか。	3.65	1.13	4%	15%	15%	42%	23%	
	基本目標 (3項目) の評価平均値	4.21	0.51						
	到達目標 (9項目) の評価平均値	4.15	0.64						
	授業総括 (3項目) の評価平均値	4.36	0.65						
	学習状況 (3項目) の評価平均値	4.03	0.84						



図 1. 2018年度における「基本目標」・「到達目標」・「授業総括」・「学習状況」の自己評価結果 (n=26)

※ 1 : 質問項目は区分毎に評価平均値の高い順に並び替えて整理した。

※ 2 : 「到達目標」の表記は教職課程コアカリキュラムでは「(1) 1), 2)…」だが、本報では「1-1, 1-2…」とした。

※ 3 : 評価基準は、5 : とてもそう思う (大変達成)、4 : そう思う (達成)、3 : どちらとも言えない、2 : そう思わない (少し不十分)、1 : 全くそう思わない (大変不十分)、である。

する必要があると考えていた。「基本目標」の評価平均値は4.21であり、評価5と評価4の合計が90%を超えるのは、3項目中2項目の67%である。一方、「到達目標」の評価平均値は4.15であるのに対し、評価5と評価4の合計が90%を超えるのは、9項目中4項目の44%と低い。しかし、評価5と評価4の合計が80%を超えるかどうかを基準にすると、「基本目標」は67%であるのに対し、「到達目標」は89%と逆転する。このため、両者の評価平均値について、エクセルでt検定（分散が等しくないと仮定した2標本による検定）を実施した結果、P値=0.3601と、2つの目標間の平均値に有意差は見られなかった。

なお、「到達目標」を、教職課程コアカリキュラムにある8項目に限定すると、評価平均値が4.11であり、その範囲は4.46～3.84となる。T大学独自項目を含めた9項目の評価平均値である4.15より、僅かに0.04低い評価平均値であるが、これらの平均値の違いについても有意差は見られなかった。

2) 授業内容の適切さ

授業内容の適切さについては、「基本目標」「到達目標」「授業総括」「学習状況」の4区分により総合的に判断し、概ね達成したと評価した。4区分毎に見ると、「基本目標」3項目の評価平均値は4.21、「到達目標」9項目の評価平均値は4.15、「授業総括」3項目の評価平均値は4.36、「学習状況」3項目の評価平均値は4.03であり（図1）、これら4区分の平均値は4.19であった。また、評価5と評価4の合計が80%を超えた項目は、23項目中21項目の91%を占めたことから、概ね達成したと評価した。

2. 教職課程コアカリキュラムで示された「到達目標」と「一般目標」の関係性はどの程度あるか。

教職課程コアカリキュラムにおける「到達目標」と「一般目標」の関係性は、「教職課程コアカリキュラム作成の背景と考え方（3）教職課程コア

カリキュラムの作成方針・留意点」において、「学生が修得する資質能力を「全体目標」、全体目標を内容のまとまり毎に分化させた「一般目標」、学生が一般目標に到達すべき個々の規準を「到達目標」として表す」¹⁾とある。このことから、両者の関係性を学生がどのように受け止めて評価しているかを調査する必要があると考えた。なお、前述のように、「一般目標」は、研究対象であった2018年度の該当学生に対しては、最終アンケートの4項目の質問項目として提示し調査した。

「一般目標」と「到達目標」の関係性については、相関係数が0.9443と強い相関関係があった（図4）。この関係性を調べるため、まず、2つの目標の関係を整理して示した（図2）。さらに、「一般目標」4項目の自己評価平均値と、それに関連した「到達目標」9項目を「一般目標」の4区分毎に整理して、平均値を算出した（図3）。加えて、図3の関係を散布図にして相関係数及び決定係数を算出した（図4）。そもそも、「到達目標」は「一般目標」を細分化した規準とも言えるものであり、理想的には両者の数値が一致し、相関係数も1.000となるべきと考えた。今回の結果は、両者の数値間において「一般目標」が「到達目標」より若干高い評価平均値となった（図3）ものの、この差に有意差は見られず、相関係数も0.9443と強い相関が見られるとともに、決定係数も0.8634

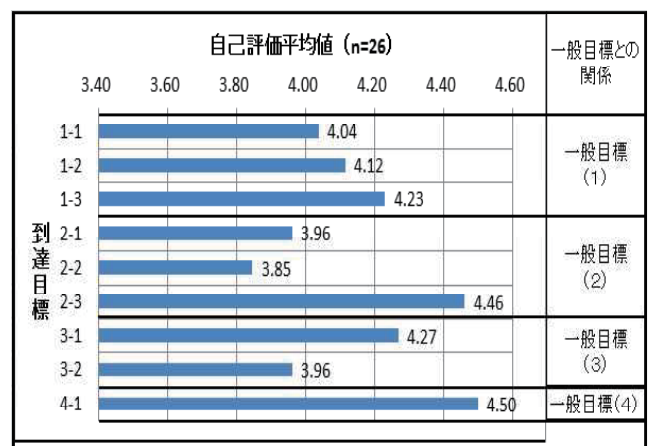


図2. 「到達目標」の自己評価平均値と「一般目標」の関係

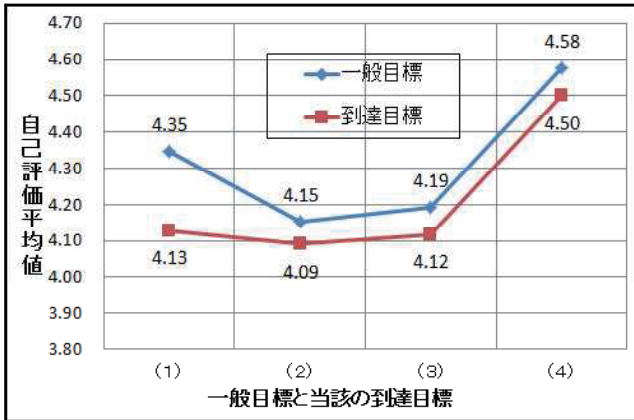


図3. 「一般目標」と「到達目標」の自己評価平均値の関係

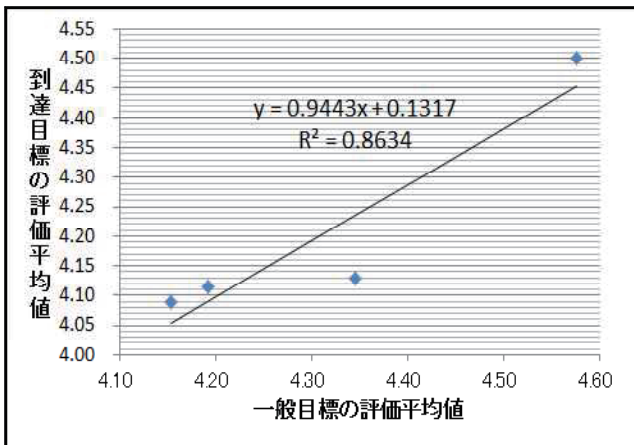


図4. 「一般目標」と「到達目標」の自己評価平均値の散布図・回帰式・決定係数

と両者間の当てはまりの良さも見られたことから、両者間の強い関係性を確認できたと言える。

このことから、仮に、評価項目を精選する必要がある場合には、「到達目標」を「一般目標」とともに評価する必要性は小さく、「到達目標」だけに限定して評価することも可能であることが示唆された。

3. 「教育課程論」において、教職課程コアカリキュラム対応表と「到達目標」の自己評価結果の関係性は授業評価に活用できるか。

教職課程コアカリキュラム対応表⁷⁾は、再課程認定の際にシラバスとともに文部科学省に提出した文書であり、シラバスの内容が、教職課程コア

表3. 教職課程コアカリキュラム対応表と授業回毎の「到達目標」の自己評価結果の関係 (n=26)

項目	(1) 教育課程の意義			(2) 教育課程の編成の方法			(3) カリキュラム・マネジメント		(4) 独自項目		
	1-1	1-2	1-3	2-1	2-2	2-3	3-1	3-2	4-1		
一般目標	学校教育において教育課程が有する役割・機能・意義を理解する。			教育課程編成の基本原理及び学校の教育実践に即した教育課程編成の方法を理解する。			教科・領域・学年をまたいでカリキュラムを把握し、学校教育課程全体をマネジメントすることの意義を理解する。		栄養教育における学習指導案作成と実施方法検討の重要性を理解している。		
到達目標	○			○							
授業回毎の到達目標	1			○							
	2			○							
	3		○	○							
	4	◎	○								
	5					○	◎	○	○		
	6					○	○	○	○		
	7					○	○	○	○		
	8					○	○	○	○		
質問番号	I-Q4	I-Q5	I-Q6	I-Q7	I-Q8	I-Q9	I-Q10	I-Q11	I-Q12	平均値	
授業回毎の自己評価平均値	1	4.04			3.96					4.00	
	2			4.23	3.96					4.10	
	3			4.23	3.96					4.10	
	4		4.12	4.23						4.17	
	5					4.48	4.27	3.96	4.50	4.30	
	6					3.85	4.48		3.96	4.50	4.19
	7					3.85	4.48		3.96	4.50	4.19
	8					3.85	4.48		3.96	4.50	4.19

※1 授業回毎の到達目標の「○」は複数回で行う場合、「◎」は単独で行う場合である。
 ※2 教職課程コアカリキュラムにおいて、到達目標の表記は、「(1) 1), 2), ...」だが、本稿では「1-1, 1-2, ...」とした。

カリキュラムが目指す内容を踏まえているかどうかを確認するものである。筆者は、これと「到達目標」の自己評価結果を用いて授業評価に活用できないかを検討することとした。表3に教職課程コアカリキュラム対応表と授業回毎の「到達目標」の自己評価結果の関係を示した。また、この関係を授業回毎の自己評価平均値の変化として図5に示した。

教職課程コアカリキュラム対応表と「到達目標」の自己評価結果の関係性は授業評価に活用できるかであるが、表3と図5より授業評価の一部として活用できると判断した。一部とした理由は2点ある。1点目の理由は、「教育課程論」の「到達

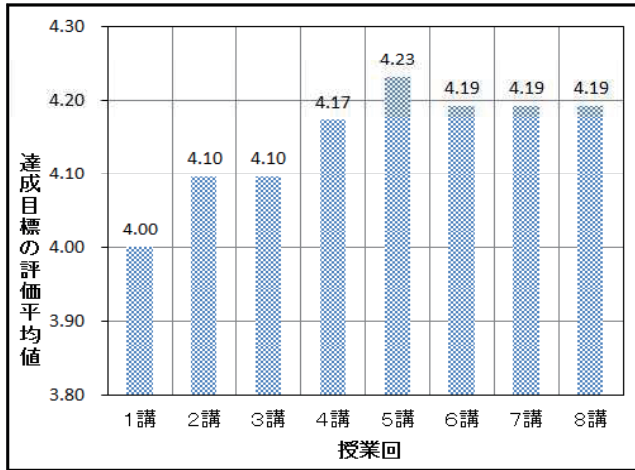


図5. 教職課程コアカリキュラム対応表による授業毎の達成目標の評価平均値

目標」9項目のうち8項目の語尾は、「…理解している」であり(図1)、知識・技能の理解に重きを置いた評価方法であるからだ。教職課程コアカリキュラムは、「全国すべての大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力を示すもの」¹⁾であるがために、「到達目標」が共通的な語尾となることはやむを得ないとしても、これだけで授業全体を評価することには無理があると考えた。また、2点目の理由としては、授業評価においては、授業を多面的・総合的に評価する視点が重要だと考えたことによる。これは、授業を設計・実施する大学教員として、授業評価において、知識・技能の理解に留まらず、学生自身の思考(省察)・判断・発表などの評価や、それらの成就感・満足感の評価とともに、他の学生との協働性や創造性、課題解決力の発揮なども含めて授業を多面的・総合的に評価すべきだと考えるからだ。

なお、先に筆者が報告した「生徒指導論」¹²⁾では、「到達目標」の全項目は教職課程コアカリキュラムに基づいていた。一方、今回の「教育課程論」では、「到達目標」に独自項目1項目を含んでいた。このことは、「到達目標」に授業者の視点を組み込んだことで、授業評価に活用する上でも有益だったと考えている。今後は、「到達目標」

そのものを吟味し再検討する必要性も生じるだろうと予想している。

4. 「教育課程論」における、授業改善の視点とは何か。

1) 授業目標や授業内容の適切さの達成状況から見る授業改善の視点

図1に示した、「基本目標」「到達目標」「授業総括」「学習状況」の自己評価結果のうち、評価者の内訳で、評価5と評価4の合計が65%だった2項目や、評価平均値が4.00未満の4項目は、授業改善の視点として重要である。まず、「到達目標」の評価平均値が4.00以下だった3項目に注目した。最も低い項目の順番で見ると、第1位は「2-2:教科・領域を横断して教育内容を選択・配列する方法を例示することができる」(評価平均値3.85、評価5と評価4の合計が65%)、第2位は2項目あり「2-1:教育課程編成の基本原則を理解している」と「3-2:カリキュラム評価の基礎的な考え方を理解している」で、ともに評価平均値は3.96、評価5と評価4の合計が81%であった。

「到達目標」2-2が、最も評価平均値が低い理由の一つとしては、他の項目の語尾は「理解している」のに対し、2-2の語尾が「例示することができる」であり、それが難易度を高めた結果であると推定した。この「例示することができる」の項目が低い評価結果となることは、新井(2019)の「生徒指導論」の報告¹²⁾でも同様の結果であった。さらに、「到達目標」の「2-1:教育課程編成の基本原則を理解している」、「3-2:カリキュラム評価の基礎的な考え方を理解している」が低い値になったことについては、これらを学生に十分理解・定着させる指導の工夫・改善が一層必要であることが示唆された。

また、「学習状況」において評価平均値が4.00以下の項目は1項目あった。「シラバスでは、「各授業前後に1時間～2時間程度の予習・復習を要

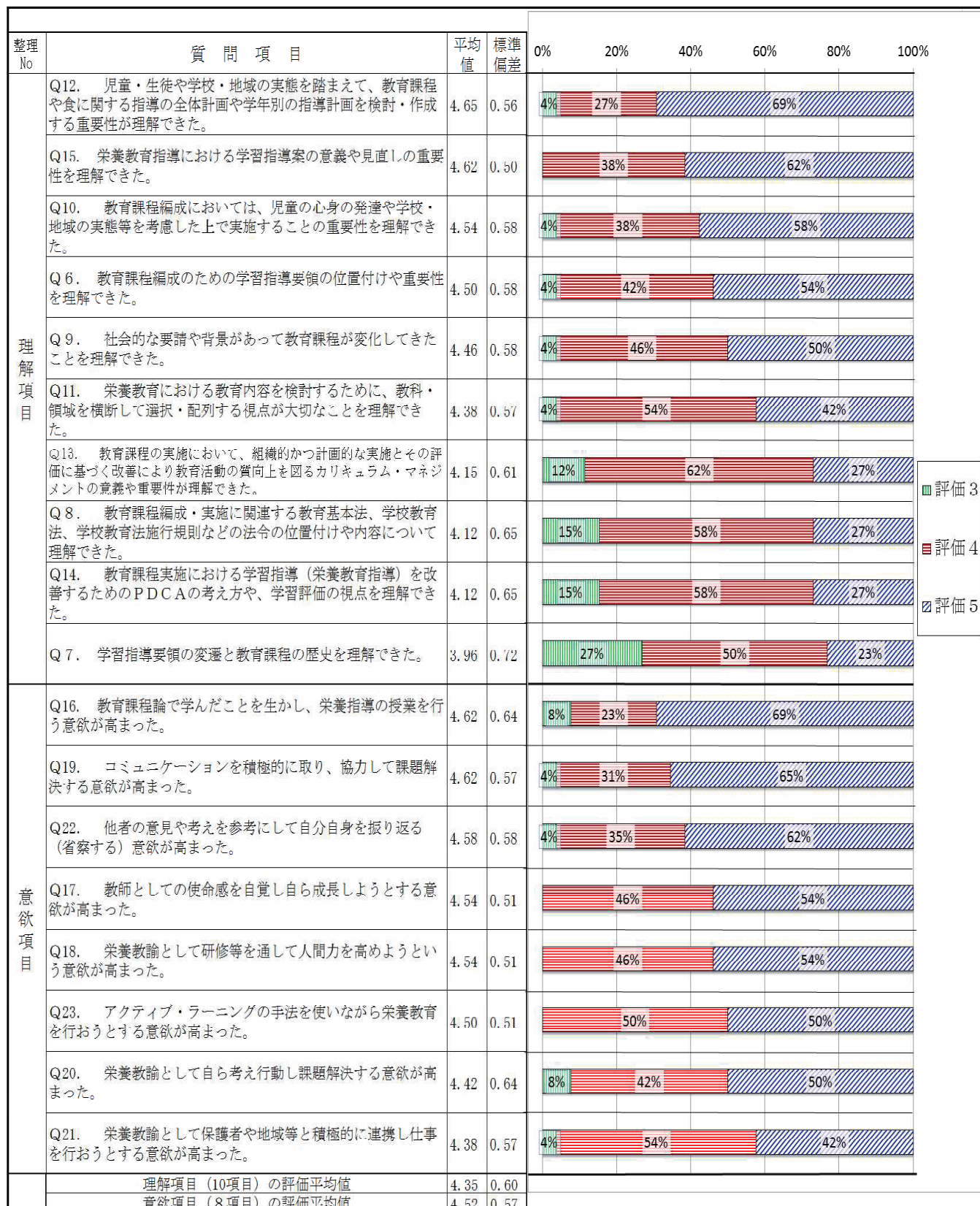


図6. 2018年度における「理解項目」と「意欲項目」の自己評価結果 (n=26)

※1：質問項目は区分毎に評価平均値の高い順に並び替えて整理した。

※2：評価基準は、5：とてもそう思う（大変達成）、4：そう思う（達成）、3：どちらとも言えない、2：そう思わない（少し不十分）、1：全くそう思わない（大変不十分）、である。

する」とあるが、このことを含めてあなたの授業への取り組みはどうでしたか」（評価平均値3.65、評価5と評価4の合計が65%で評価1と評価2も存在）が、今回の質問項目で最も低い値となった。この結果も、新井（2019）の「生徒指導論」の報告¹²⁾と同様の結果であった。この項目の数値の低さはT大学の学生の特徴でもあるが、学生間の意識・意欲の差も大きいことを示している。このことから、学生の学習に取り組む姿勢を高める指導の工夫・改善が必要であることが示唆された。

2) 「教育課程論」を通して、どのような資質能力が身に付いたかに関する授業改善の視点

本授業を通して、どのような資質能力が身に付いたかについては、前述したように「Ⅱ. 振り返り評価アンケート」において、「理解項目」10項目と「意欲項目」8項目の自己評価結果から考察できる。図6には「理解項目」と「意欲項目」をそれぞれ評価平均値の高い順に並び替えて示した。図6より「理解項目」10項目の評価平均値は4.35で4.65～3.96の範囲にあった。また、「意欲項目」8項目の評価平均値は4.52で4.62～4.38の範囲にあった。これらの評価平均値は、「到達目標」の評価平均値4.15より明らかに高かった。

さて、これら18項目についても、1)と同様に評価平均値の低い項目は、授業改善の視点として重要である。「理解項目」で評価平均値が4.00以下だったのは1項目だけであった。評価平均値の最も低い順番で見ると、第1位は、「Q7. 学習指導要領の変遷と教育課程の歴史を理解できた」（評価平均値3.96、評価5と評価4の合計は77%）であった。次いで第2位は2項目あり、「Q14. 教育課程実施における学習指導（栄養教育指導）を改善するためのPDCAの考え方や、学習評価の視点を理解できた」、「Q8. 教育課程編成・実施に関連する教育基本法、学校教育法、学校教育法施行規則などの法令の位置付けや内容について理解できた」で、ともに評価平均値は4.12、評価5と評価

4の合計は85%であった。第1位のQ7.は、「到達目標」1-2との関連の強い項目であり、その評価平均値が、4.12（9項目中ワースト5位）であったことも関係があると考えた。同様にQ14.は、「到達目標」3-2との関連の強い項目であり、Q8.も、「到達目標」2-1との関連の強い項目である。それらの評価平均値はともに、3.96（9項目中ワースト2位）であった。この結果から、これら項目の理解が深まる授業改善の必要性が、明確に示唆された。

続いて「意欲項目」に注目すると、「意欲項目」そのものの評価平均値が4.52で、4.62～4.38の範囲にあったことは、授業を通して意欲を高めた状況であると判断できた。一方、授業改善の視点としては、その最も低い第1位の項目だけに注目することとした。それは、「Q21. 栄養教諭として保護者や地域等と積極的に連携し仕事を行おうとする意欲が高まった」（評価平均値4.38、評価5と評価4の合計は96%）であった。この項目に関連する「到達目標」は存在しないが、栄養教諭にとって、この項目に関する意欲を持つことは仕事を推進する上で必要不可欠な資質と考えられ、次年度以降、更に改善できるよう指導していきたい。

Ⅷ. まとめ

本研究では、教職課程コアカリキュラム対応型授業である「教育課程論」における2018年度の試行実践における効果について、3つの研究課題を設定して検証した。

研究対象は、2018年度に「教育課程論」を履修したT大学栄養学科・教職課程の1年次生のうち、研究参加に同意し、かつ必要なデータが全て揃っていた26名とした。研究方法は、「最終授業後のアンケート」（質問紙調査で5件法と記述を併用、質問項目は40項目）を実施し、当該学生の自己評価結果について統計解析を行った。

1つ目の課題である「教職課程コアカリキュラ

ム対応型の「教育課程論」は、授業目標を達成しているか。また、授業内容は適切であったか。」であるが、授業目標については、概ね達成したと評価した。これは、従来の授業目標である「基本目標」3項目の評価平均値が4.21、教職課程コアカリキュラムが規定した8項目の「到達目標」に独自項目1項目を追加した9項目の評価平均値が4.15であったことや、評価段階の内訳から判断した。なお、「基本目標」と「到達目標」の2つの評価平均値の間には有意差は見られなかった。

また、授業内容の適切さについては、「基本目標」「到達目標」「授業総括」「学習状況」の4区分により総合的に判断し、概ね達成したと評価した。「基本目標」3項目の評価平均値は4.21、「到達目標」9項目の評価平均値は4.15、「授業総括」3項目の評価平均値は4.36、「学習状況」3項目の評価平均値は4.03であり（図1）、これら4区分の平均値は4.19であった。さらに、4区分18項目の評価段階の内訳を見ると、評価5と評価4の合計が80%を超えた項目は、18項目中16項目（89%）であった。

2つ目の課題である「教職課程コアカリキュラムで示された「到達目標」と「一般目標」の関係性はどの程度あるか。」であるが、両者の相関係数は0.9443となり、強い相関関係が見られた。このことは、「到達目標」が「一般目標」を細分化した具体的な評価規準であることから、理論的には、相関係数が1.000となることが予想されたが、ほぼそれを裏付ける結果となった。また、この結果から、仮に評価項目を精選する必要がある場合には、「到達目標」を「一般目標」とともに評価する必要性は小さく、「到達目標」だけに限定して評価することも可能であることが示唆された。

3つ目の課題である「教育課程論」において、教職課程コアカリキュラム対応表⁷⁾と「到達目標」の自己評価結果の関係性は授業評価に活用できるか。」については、授業評価の一部として活用で

きると判断した。一部とした1つ目の理由は、「到達目標」が知識・技能の理解に重きを置いた評価項目であり、授業全体を評価するには無理があると考えたこと。2つ目の理由は、授業評価においては、授業を多面的・総合的に評価する視点が重要だと考えるからだ。しかし、提案した方法は、授業回毎の「到達目標」の状況を簡易的に把握できる利点もあり、授業評価の一部として活用することは十分可能と考えた。

さらに、今回の結果を受け、「教育課程論」における授業改善の視点を、評価平均値の低い項目や評価5と評価4の合計が少ない項目に着目して確認した。評価項目40項目中で評価平均値が4.00以下の項目は5項目あった。「学習状況」において最も評価平均値が低かったのは、「シラバスでは、「各授業前後に1時間～2時間程度の予習・復習を要する」とあるが、このことを含めてあなたの授業への取り組みはどうでしたか」（評価平均値3.65、評価5と評価4の合計が65%で評価1と評価2も存在）が、今回の質問項目で最も低い値となった。

また、「到達目標」において最も評価平均値が低かった第1位は、「2-2：教科・領域を横断して教育内容を選択・配列する方法を例示することができる」（評価平均値3.85、評価5と評価4の合計が65%）であった。第2位は2項目あり、「2-1：教育課程編成の基本原則を理解している」と「3-2：カリキュラム評価の基礎的な考え方を理解している」で、ともに評価平均値は3.96、評価5と評価4の合計は81%であった。さらに、「理解項目」において評価平均値が最も低かったのは、「Q7. 学習指導要領の変遷と教育課程の歴史を理解できた」（評価平均値3.96、評価5と評価4の合計は77%）であった。これらの項目については、今後の授業改善が特に必要なことが示唆された。

IX. 今後の課題

今後の課題は3点ある。1点目の課題は、教職課程コアカリキュラム対応型授業である「教育課程論」における、学習指導案の作成や模擬授業の実施などのアクティブ・ラーニング型授業の実践効果の検証である。既にアンケートは回収済みなので、今後、早急に、その効果を検証したい。

2点目の課題は、授業改善の実施である。今回の授業目標の達成状況は、概ね達成できたと判断したが、評価平均値が下位の質問項目は、学生が理解しにくい、あるいは定着しにくい、苦手としている部分である。分かりやすい説明や理解の確認などのきめ細やかな指導も含め、これら事項の定着を図る授業の見直し・改善に取り組みたい。

3点目の課題は、教職課程コアカリキュラム対応型授業である「教育課程論」における授業評価項目の見直しの検討である。本稿では、「到達目標」を教職課程コアカリキュラムに規定された文言で質問項目にして調査した。しかし、これだけで授業の効果を評価するには難しさがあることが判明した。今回、授業を通してどのような資質能力が身に付いたかを、「理解項目」「意欲項目」で測定したが、「理解項目」は「到達目標」とも一部重複している。このことから、「理解項目」を見直すことを通して、「到達目標」と、いわゆるダブルチェックになる状況にして、評価の信頼性を高めたいと考えている。まずは、「理解項目」の見直しに着手し、その効果を確認したい。

謝辞

本研究に参加を承諾し、アンケートに回答した2018年度の「教育課程論」受講者である26名の学生の皆様に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省（教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会）：教職課程コアカリキュラム, 2017.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chou

sa/shotou/126/houkoku/1398442.htm

(2017年11月20日閲覧)

- 2) 新井英志：栄養教諭養成課程における「生徒指導論」の実践と効果－実践的指導力と「チーム学校」の意識の向上を目指して－, 天使大学紀要18(1), 29-44, 2018.
- 3) 新井英志：栄養教諭養成課程における「生徒指導論」の実践と効果(2)－資質・能力向上を目指すアクティブ・ラーニング型授業の効果－, 天使大学紀要19(1), 1-17, 2018.
- 4) 細川和仁：大学生の授業評価観点に関する事例研究－教職課程科目「教育課程論」を対象として－, 大阪大学大学院人間科学研究科紀要(30), 144-157, 2004.
- 5) 山田茂利：「総合的な学習の時間」の充実に係る養成段階における学修－科目区分の大括り化と教職課程コアカリキュラムを踏まえた「総合的な学習概論」のシラバスの改善－, 帝京大学教職センター年報(5), 21-33, 2018.
- 6) 佐藤豊 他：体育・スポーツ系教員養成大学における教職課程コアカリキュラムを取り入れた授業検討の試み（研究資料）, 桐蔭スポーツ科学(2), 33-43, 2019.
- 7) 文部科学省初等中等教育局教職員課：教職課程認定申請の手引（平成31年度開設用）【再課程認定】, 49-51, 2017.
- 8) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編, 東洋館出版社, 2018.
- 9) 山崎準二編：教育課程, 学文社, 2009.
- 10) 田中耕治編：よくわかる教育課程, ミネルヴァ書房, 2009.
- 11) 田沼茂紀：豊かな学びを育む教育課程の理論と方法, 北樹出版, 2012.
- 12) 新井英志：栄養教諭養成課程における「生徒指導論」の実践と効果(3)－教職課程コアカリキュラム対応型授業の試行的実践における効果の検証－, 天使大学紀要20(1), 1-15, 2019.